

銭形平次捕物控

お吉お雪

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、あれを御存じですかえ」

ガラツ八の八五郎はいきなり飛び込んで来ると、きっかけも脈絡もなく、こんなことを言うのでした。

「あ、知つてるとも。八五郎が近ごろ両国の水茶屋に入り浸つて、お茶ばかり飲んで腹を下していることまで見通しだよ。どうだ驚いただろう」

銭形の平次はこの秘蔵の子分が、眼を白黒するのを、面白そうに眺めながら、こんな人の悪いことを言うのです。

「親分の前だが、それが大変なんで」

「八五郎の嫁になりたいという茶汲女でもあるのかい。劫こうを経たへのはいけないよ」

「そんな間拔けな話じゃありませんよ」

「恐ろしく突き詰めた顔をするじゃないか。悪いことは言わない、心中や駆落だけは止よしてくれ。叔母さんが心配するぜ」

いっこう相手にならない平次の前に、八五郎はでっかい財布の中から半紙一枚に仮名で書き流した手紙を出して見せるのでした。「これを読んで下さいよ、親分」

「なんだ」

ようやく真剣になった平次、煙管きせるを投ほうり出すと、紙の皺しわを延ば

しながらぎつと読み下しました。

文字は金釘流（かなくぎりゆう）、文意もしどろもどろですが大骨折りで弁（べん）

慶（い）読みにすると、

「——近ごろ本所元町の越前屋半兵衛のところに、いろいろ不思議な事が起つて不気味でかなわぬ。いずれは悪人の悪（わる）企（たく）みではあるうが、お二人のお嬢様に万一のことがあつてはいけなからお知らせする——」と書いてあるのです。

「ね、こいつはちよつと気になるでしょう」

八五郎の鼻は少しうごめきます。

「それでどうしたというのだ」

「水茶屋に入り浸ると見せかけて、よそながら越前屋を見張りま

したよ。二日三晩経つても、何にも起らないと思うと——」

「当り前だ。こいつは悪戯わるさにきまつているじやないか。字は恐ろしく下手だが、わざと下手ツ糞くそに書いたのだよ——釣筆つりふでと言つてな、天井から糸で筆を吊つて、紙の方を動かしながら書くところんな字になるよ」

「ところが變つたことがあつたんですよ。親分」

「どんなことがあつたんだ」

「越前屋の後添いの連れ子で、手代のように働いている福松ほうそうというのが、ゆうべ両国橋の上から大川へ投り込まれたんです」

「死んだのかい」

「死にはしません。房州へ里にやられて、海を見ながら育つたん

で、魚みたいに泳げるんだそうで。——もつともこの寒空だから、念入りに風邪は引きましたよ」

「投り込んだ相手は判るのか」

「ほおかむ頼冠をりをした遊び人風の男が、いきなり橋の上で突き当って、

——氣を付けろ、——何を、——かなんか二た言三言やり合う間もなく、足をさらって投り込んだそうで」

「盗とられた物は？」

「何にも盗られなかったそうですよ」

「なるほどそいつは少しおかしいな。——もう少し見張っているがいい。こんな時でもなきや、大っぴらに水茶屋に入れ揚げられめえ」

「へッ、まあそんなことで」

八五郎は素直に帰って行きましたが、それから五六日経つと、「大變」の旋風つむじを起してやって来ました。

「親分、大變」

「とうとう来やがった。今日あたりはそいつが来るような空合いだと思つたよ」

「落着いちゃいけませんよ。越前屋の娘が殺されたんですぜ」

「なんだと？」

平次もさすがに驚きました。こいつはいつもの大變とは仕入れが違いそうです。

「親分、ちよつと行つてみて下さい。あつしが下手人げしゅにんを挙げな

きや、金釘流の手紙の手前、男が廃^{すた}りますよ」

「よし判ったよ。八五郎の男が廃^{すた}つちや気の毒だ」

銭形平次は正月早々神輿^{みこし}をあげて、この一風変った難事件に首を突っ込んでみる氣になつたのでした。

二

越前屋半兵衛というのは、本石町四丁目の越前屋半十郎の出店で、公儀御用の下請^{したうけおい}負^おいまでする蠟燭^{ろうそく}問屋ですが、主人の半兵衛は五十二三の働き盛りのくせに、雑俳^{ざっばい}に凝^こつて商売の方を構^{かま}わず、店は番頭の理八が采配^{ふる}を揮^{ふる}い、手代の吉五郎と福松を動か

して、盛んにやっております。

先の内儀は、お吉お雪の二人の娘を遺^{のこ}して早く亡くなり、後添いのお国は連れ子の福松と一緒に入って、十年前から世帯を切盛りしております。

手代の吉五郎は主人の遠縁にあたり、商売下手ですが、正直一途の朴^{ぼくとつ}訥な男。連れ子の福松はちよつと意気な男で、弁舌も才智も相当。どちらも二十四で、いずれお吉お雪姉妹に娶^{めあわ}合せるのではないかと世間では言っております。お吉お雪は揃って美しく生い立ち、店で油臭く立働いている手代と一緒にいる気があるかどうか、そこまではわかりません。

番頭の理八は六十近い年配で、ただもう商売大事に働くほか何

の余念もありませんが、八五郎が調べたところでは、昔はかなりの道楽者で、配つれあい偶のお市というのは、素人しろうとではなかったというところまで判っております。

以上は、神田の平次の家から東両国へ駆けつける途々みちみち、八五郎が息を切らしながら平次のために説明してくれた筋でした。

「可哀想なことをしましたよ。お吉は本所一番と言われた娘で、両国中の水茶屋にも、あれほど人目に立つのはなかったが——」
これが八五郎の結論です。

「お前が七日も八日も見張ったのは、そのためだったのか」
「冗談じゃありませんよ」

そんな無駄を言ううちに、二人は越前屋の店先に着いておりま

した。

「あ、親分さん方」

少しあわて気味の番頭と、白い眼で迎える親類たちの間を通つて、平次と八五郎は奥へ入りました。ムツと立ち籠めた香の煙、緊張と不安を押し包んだようなただならぬ空氣、——物馴れた平次と八五郎にも、この家の中に漂う、異常なものを感じないわけに行きません。

奥の間に寝かしたまま、検屍けんしを待つてゐる娘お吉の死体を、平次は膝行いざり寄つて一目見せて貰いました。醜かるべき絞殺死体ですが、これはまたなんという美しさでしょう。

無念の眦まなじりこそ裂けておりますが、彫きざんだような眼鼻立ちが恐怖

に歪められて、物凄さもまた一入です。ゆが ひとしお

「紐も縄もなかったのか」ひも

平次は死骸の襟をはだけました。玉の肌は無残にも傷付いて、痛々しく組紐のあとが残っておりますが、そこには何にも巻いてはいなかったのです。

「丈夫な腰紐が巻きついていましたよ」

八五郎はうさんの鼻をふくらまします。

「死骸の首に巻いてあった紐はどうした」

平次は振り返ると厳しく番頭の理八を責めました。

「へエ——」

理八は月代さかやきまで蒼くなりましたが、急には返事もできない様

子です。

「まだ検屍前じゃないか。余計なことをするとかえつてためにならないぜ」

「……………」

平次の調子はいくらか穏やかになりましたが、その底には仮かしや借くのない響ききがありました。

「ヘエ——先刻さつきまでありましたが——」

「八、捜して来てくれ。誰が持つて行つたか、そいつも突き止めるんだ」

「……………」

八五郎は黙つて飛んで行きました。妙な緊迫が、すっかり座を

白けさせます。

「親分、御苦労さまで——」

静かに出て来たのは、雑俳に凝っているという、主人の半兵衛です。まだ鬢^{びん}に白いものも交えない品の良い中老年人です。

「お気の毒ですね。——ところでこんな虐^{むご}たらしいことをする人間に心当りはありませんか。——ゆうべ何か変ったことでも——」

平次は静かに問い進みました。

「いえ、少しも。——私は二番目娘のお雪を伴^つれて、麻布の親類へ行つて泊り、けさ歸つて来たばかりで、途方に暮れているところですよ」

半兵衛は大きな悲歎と驚きに打ちひしがれて、娘の死体から眼

を反^{そむ}けました。

「亡くなつたお吉さんの縁談の口は？」

「選り好みを言つて、まだ決つたわけじゃありません。が——」

「手代の福松に娶合せるだろうと世間では言っているようですが

——」

「私もそんなことを考えていましたよ」

「妹のお雪さんの方は？」

「これも決つてはいませんが——」

主人の調子には妙に煮え切らないところがあります。この煮え切らなさが、お吉の命を縮めた原因ではなかつたでしょうか。平次はフトそんなことを考えたりしました。

「親分、この野郎が隠したんで。——小僧の常吉が教えてくれたんで、わけもなく見付かりましたよ」

ガラツハは地味な女の腰紐を一本左手にブラブラさせながら、右手で若い男を追っ立てて来たのです。

「福松。——どうしたのだ」

主人はそれを一と目見て、暗い顔をします。

「……………」

ガラツハに突きのめされるように、ヘタヘタと坐った福松は、歎願するような眼をあげて平次を見やるのでした。

「どうしてこれを隠したんだ」

平次は腰紐を取って、福松に迫りました。

「……………」

福松は田螺たにしのように口を噤つぶみます。二十四というにしては若々しく、泳ぎの名人というよりは、手踊の一つもやりそうな人柄です。

「こいつは誰のものなんだ」

浅黄色の絹をくけた腰紐、一人くらいは殺せそうな丈夫な品ですが、それにしてはなんとなく優しさと品のよさがこぼれます。「言わなくて済むことじゃない。この紐は誰のだ」

平次は少し嵩かさにかかりました。いつもの平次にはないことです。

「……………」

相変らず黙りこくっている福松。

「八、この野郎を縛ってしまえッ」

「へエ」

八五郎は少しばかり腑ふに落ちない様子でした。これだけの証拠で人を縛らせるなどは、平次の日頃の流儀にはないことです。

「縛らないか、八」

「へエ——」

八五郎は立ち上がりました。

「御用だぞッ、野郎ッ」

振り上げた十手の下へ、

「待って下さい、親分さん。その腰紐は私の物です。福松は私を庇かばっただけでございます」

「転げ込んだのは、四十三四の女、——いやそれは後で年齢としを聴いてから四十三四と判ったことで、ちよつと見は三十二三と言つてもいい上品な女でした。」

「お国、馬鹿なことを言うな」

主人の半兵衛はそれを庇うように手を拡げましたが、

「いえ、隠しても無駄でございます。その腰紐が私のだということとは、家中で知らないものはございません」

後添いのお国の美しい顔は、緊張に蒼あおざめて、夫半兵衛の拡げた腕の中から、歎願するような眼を平次の方に向けるのでした。

改めて今朝の様子を訊くと、朝、雨戸を開けて、お吉の死骸を見付けたのは下女のお作。

「驚きましたよ。お嬢さんが蒲団ふとんから乗出し気味に、殺されてい
るんですもの」

これは明けっ放しの調子で物を言う、二十七八の房州女です。

「殺されている——とすぐ判ったのか」

平次はさっそく突っ込みました。

「そりや、首に腰紐を巻いて、眼を見張ったまま蒼くなってるん
ですもの」

「障子は開いていたのか」

「え、いつもそんなことはないのが、障子が開いているんで、雨戸をくりながら見たんです」

「雨戸は？」

平次の問いの次第に重要性を帯びるのがガラッ八にはよく判ります。

「締っていました」

「^{さん}棧か、心張りか。——それとも——？」

「棧はおりていました。でも」

「何か変ったことがあったのか」

「心張りが逆になって、さわれれば落ちるようになっていました。

ゆうべ私が締めた時は——」

「ゆうべ締めた時と違っていたのだな」

「……………」

お作はうなずきます。

その次に逢ったのはお吉の妹のお雪、これは丸ぼちやの明るい娘で、殺された姉のお吉よりは、人によつては美しいと見るでしょう。

十七の懐ろ子で、何を訊いても一向に要領を得ず、継母のお国のことだけは、

「そりや善いお母さんです。真実ほんとうの母でもあんなにはしてくれないでしょう」

と口を極めて褒めるのが、決して忤こしらえごととは思われません。

それから、昨夜は父親と一緒に麻布の親類に行つて、父親は俳諧いはいに更け、自分は従妹たちと話に夢中になつて、とうとう泊り込んでしまい、けさ歸つて来て姉が殺されているのに驚いたということだけは、娘らしい調子で説明してくれました。

姉のお吉の縁談のことは何にも知らず、ただお吉は氣位が高く、手代の吉五郎も、継母の連れ子の福松も相手にしなかつたというだけは確かのようにです。

「でも吉五郎と福松と、どっちが好きだったか判るだろう」
平次は重ねて訊くと、

「そりや——」

お雪はそう言つて赤くなるのでした。姉妹が蔭で噂うわさし合つてい

たことを思い出したのでしよう。

「福松の方が評判がよかったようだな」

「……………」

お雪は黙ってうなずきました。

それから平次は、手代の吉五郎、小僧の常吉と一人一人逢つてみました、何の収穫もありません。吉五郎は主人半兵衛の遠縁で子飼いの手代ですが、身装みなりも至つて質素にひどい無口で、少し三白眼にして人を見上げる人相は、あまり結構ではありませんが、主人始め店中の者は、この上もない正直者だと保証しております。

「お嬢さんが殺されたことについて、何か心当りはないのか」

平次の問いに、しばらく考え込んでいた吉五郎は、

「何にもございません」

重々しく答えるだけです。

もつとも殺されたお吉の部屋につづいているのは、妹のお雪と主人の半兵衛夫婦の部屋だけで、店の二階に寝ている吉五郎も福松も、庭から廻って雨戸を開けさせるか、他の奉公人たちの寝ている中の間を通らなければ、お吉の寝部屋へは来られなかったのです。

「昨夜福松は夜半よなかに外へ出なかつたのか」

平次の問いにはいろいろの含みがあります。

「何にも知りません。——私はよく眠る方で——」

吉五郎の重い口は、肯定とも否定ともつかぬことを言います。

「これまでも、福松はちよいちよい夜半に出ることがあったんだろう」

「いえ、そんなことはありません」

吉五郎は激しく首を振りしました。

朋輩ほうばいのために弁じてやる一

生懸命さが、その眼に読めます。

平次はなお家の内外、わけても間取りの具合と、庭の足跡などを、この上もなく念入りに調べましたが、何の得るところもありません。まもなく検屍の役人が出張り、町役人、土地の御用聞など立会いの上、法のごとく調べは終わりましたが、平次は下手げしゅに人の見当が付かないと言い張って誰も挙げようとはしなかったのです。

四

「親分、なぜ縛らなかつたんです」

帰る途々^{みちみち}ガラッ八は問いかけました。

「誰を？」

「判っているじやありませんか。下手人はあの継母でしょう。――

――綺麗な顔をしているが、あの歳になると女は喰えないから、なかなか尻尾を掴^{つか}ませない――」

八五郎は、こんな穿^{うが}つたことを言うのです。

「あの継母が下手人という証拠があるのかい」

平次はいつこう張合いありません。

「だつてあの腰紐が――」

「一番喰えない四十女が、自分の腰紐で継娘を絞め殺すだろうか」
「でも、主人と妹娘は留守で、あの姉娘の部屋へ自由に行けるのは、継母だけでしょう」

「だから俺は継母が下手人でないと思うのさ。お前とは物の考え方があべこべだ」

「それに雨戸は内から締っていたでしょう」

「心張棒が逆に掛っていたそうだな」

「そいつはどんな謎でしょう」

「下女が夕方締めた雨戸を、夜中にいちど開けて締め直した者が

あるのさ。その開けた者と締めた者が同じ人間か、別の人間か、そいつを見極めるとこの謎は解けるだろうよ。とにかく締めた奴は平常雨戸ふだんなんかあんまり締めたことのない人間だ。心張棒を平気で逆にかけるのは、大抵女だ」

「すると？」

「まあせくな、その雨戸を締めた奴が下手人だと言うわけじゃない。お前はこれから引返して、あの小僧をひと責め責めてみる気はないか」

「小僧？　というと」

「常吉とか言つたな、腰紐のことを教えた小僧だよ。——十四五の小僧は、いろんなところに気の付くものだ」

「四十代の女みたいです」

「ハッハッハッ、一番間抜けなのは、俺たちのような中年の男さ」
カラカラと笑う平次は、まだ三十代に入っただけの若さだったのです。

現場——両国元町へ引返したガラッ八の八五郎は、その晩遅くなつて、平次の家へ引揚げて来ました。

「親分、判りましたよ」

「何が判つたんだ」

「下手人が判つたんで、——その場で縛るつもりでしたが一応親分に相談してからと思つて——」

「たいそう義理堅いんだな。誰だえ、その下手人てエのは、まさ

か福松じゃあるまいな」

「その福松だから驚くでしょう」

「あいつは大川に投げ込まれてるじゃないか」

平次はいつかのことを思い出したのです。

「自分も狙^{ねら}われているように見える細工ですよ。ひと泳ぎして疑いをやり過せば、鼻風邪なんか安い資本^{もと}ですぜ」

「それでどうした」

「その小僧は何もかもしゃべってしまいましたよ。あの晩福松がお吉と逢う約束のあったことまで——」

「何？」

「親の半兵衛はいよいよお吉と福松を、一緒にする気だったよう

で、容易にウンと言わないお吉に、本人の福松が直に逢つてみる
気になったんでしよう」

八五郎の聞込みと推理は、なかなか微妙です。

「で？」

「小僧に聴いたことを証拠に突つ込むと、福松はどうとうあの晩
お吉に逢つて、心持を訊いたことだけは白状しましたよ。もつと
もお吉も近頃親の言う通り福松と一緒になる気だったと判つて、
そのまま安心して帰つたとは言いましたかね」

「雨戸は誰が締めたか訊かなかつたのか」

「開けてくれたのはお吉だが——そこまでは聴きません。——お
吉は暗い庭へ灯の射すように、しばらく縁側から福松を見送つて

いたとは言いましたがね」

「それは真^{ほんとう}実だろうな」

平次はいつこう気の乗った様子もなかったのです。

「ところで、もう一つ良い証拠を見付けて来ましたよ。親分」

「なんだい」

「これですよ」

ガラツ八は懷中から、真^{さなだひも}田紐の付いた前掛けを一つ取出しました。

「あッ、これがどこにあつたんだ」

「隣の部屋——お吉の殺された部屋と、主人夫婦の部屋の間の納^な戸^{んど}の戸棚の抽^{ひきだし}斗を抜いた奥にありましたよ」

「俺はこれを探していたんだ。お吉の喉のどを絞めたのは、絹のくけ紐じゃなくて、丈夫な真田紐に違いない。死骸の首には真田の編あ目がはつきり残っていた。お前も見ただはずだ」

「親分がそう言うだろうと思って、あの三つの部屋を一刻あまり捜しましたよ」

「そいつは大手柄だった」

「それでも福松が下手人じゃないでしようか。親分」

ガラツ八は少し果しはたまなこ眼もつとでした。

「一応そう思うのも尤もだが、お吉は福松と一緒にになる気だったし」

「前掛けは、親分」

「自分の前掛けで人を殺すほど福松は馬鹿じゃあるまい」

「でもカツとなったらどうでしょう」

「喧嘩をしてカツとなったら、一と部屋置いて隣に寝ているお国が気がつくよ」

「さア判らねエ」

ガラツ八は高々と腕を組んで、捻ひねつてもあまり結構な智恵の出
 そうもない首を捻るのでした。

「やはり母親かな。——いや、そんなはずはない」

平次もそれにつれて深々と腕こまぬを拱こまぬきます。

五

それから三月経ちました。

福松は土地の御用聞に縛られて、石まで抱かされたという評判が立ちましたが、白状しなかったのか、証拠が揃わなかったのか、そのまま許されて帰り、越前屋のお吉殺しは、有^う耶^や無^む耶^やのうちに桜が咲く時候になってしまったのです。

「親分、越前屋のお吉殺しはどうなったでしょう？」

ガラツ八が思い出したように言うと、平次は、

「判らないよ。俺たちの思いも寄らない人間の仕業^{しわざ}さ。だが油断をしちやならねえ。いつどんなことで、下手人が尻尾を出すかもわからないから——」

そんな暢気のんきなことを言うのでした。どんな巧妙な詭計トリックも時の力の前には崩壊することを平次は知っていたのです。

果してその日か来ました。

「親分、大変。越前屋の――」

ガラツ八が、がなり込んで来たのは、もう桜も咲き揃った三月の中旬でした。

「何？ 二番娘が殺されたんじゃないな」

平次も愕然がくぜんとして起上がりました。もうガラツ八をからかっている気にもなれません。

「殺されたのは、あのお内儀さんですよ。親分」

「何？ お内儀が？」

平次はもう飛び出しておりました。それほどこの事件が平次にとつても予想外だった様子です。

両国元町の越前屋まで来ると、二度目の災難に、店の中はかえつてシーンと静まり返つて、うっかり入るのさえ不気味に思われます。

「御免よ」

「あ、親分」

雑俳に凝っているという落着き払った主人も、今度はさすがに面喰らつて、しどろもどろの挨拶です。

中へ入つてみると、なんとなく顛倒して、てんとう大店らしい日頃

の節度もなく、奉公人たちはただうろうろと平次の一行を迎える

だけです。

その中で一番落着き払っていたのは、若い手代の吉五郎でした。平次とガラッ八が入ると、後ろへ廻つて心静かにその履物^{はきもの}などを直しております。

奥へ入つてみると、後添いのお国は、継^ましい二番目娘お雪の部屋で、床の中に入ったまま、見事に喉笛を貫かれて死んでおりました。傷の様子では相当鋭利な脇差らしく見えますが、血の海中にも、それらしい兇器は見当りません。

「ここはお内儀さんの部屋ですか」

平次は何よりそれが不思議だったのです。三月前にお吉が殺された部屋の手前、ここは妹娘のお雪の部屋とその時間かされたは

ずです。

「いえ、ここはお雪の部屋ですが、ゆうべ私が本石町の店へ泊つて留守だったので、家内が娘の身の上を心配して、部屋を換えて寝たんだそうです」

「すると——？」

「くせもの曲者は娘を殺すつもりで来たのかも知れませんね」

主人の半兵衛もそんなことまで気が廻るのでした。

「おや？」

平次は小机の上の硯すずりに、摺すりかけの水の残っているのと机の上に置いた筆の穂が、心持湿しめっていることに気がつききました。

「何か書いたものがなかったでしうか」

平次は顔を挙げて訊きます。

「さア」

心もとない主人の後ろから、小僧の常吉が顔を出していることに平次は気が付きました。

「小僧さん、気が付かなかったかい。この机の上に、何か書いたものがあつたはずだと思うが――」

「ありましたよ、親分」

「？」

「今朝、たしかにあつたんです。半紙へ書いて置んだのが、私とお作どんが見たときは、机の上にあつたに違いないが、大勢入つて来た時は、もうありませんでしたよ」

「大勢というと——」

「お作どんが無暗むやみに大きな声を出すから、店中の者が飛んで来るじゃありませんか」

「一番先に来たのは誰だい」

「福松どんですよ。それから吉五郎どん、その次は番頭さんで、それから——」

「よくそんなことが判るんだね」

「あつしはね、親分の前だが、御用聞になろうと思っているんで。へエー、銭形の親分の二代目を狙っているんですよ」

「そいつは豪儀だ。——ところで、机の上の手紙を隠したのは誰だか知っているだろう」

「知っていますよ」

「誰だい、そいつは」

「……………」

小僧の常吉は不意に黙り込んでしまいました。平次は驚いて四^あ方^{たり}を見ましたが、眼の及ぶ限りでは、常吉を牽^{けん}制^{せい}していそうな人間もありません。

「小僧さん、その手紙を隠した人間は誰だい。ちよいと教えてくれ」

平次は一生懸命でしたが、脅^{おび}えきつた常吉の口は、もう二度と開きそうもなかったのです。

「親分」

八五郎は様子を覺さとつて目配せしました。

「頼むよ八、なんとかうまい具合にやってくれ」

平次は小僧の顎あごを取るのを八五郎に任せて、主人半兵衛を初め、店中の者に逢つてみました。その中では二番目娘のお雪が、

「この前に姉さんが殺された時も、父さんが留守だったから、今晚も何か危ないことがあるかも知れない。万一の用心に部屋を換えて寝るようになって、おつ母さんが言うもんですから——」

と、筋の通つたことを言つてくれます。

下女のお作は、

「今朝も雨戸は締っていましたよ。もつとも、上下の棧さんがおりていただけで、心張棒は外したままでした」

と言うのです。平次は何か重大な暗示を得たらしく、雨戸を念入りに調べてみると、下の棧は雨戸を締めさえすれば、自然にのりるようになっており、上の棧のある場所には外側から雨戸に、^{きり}錐で突いたらしい穴が幾つも幾つも明いております。

「八、解るか」

平次は獲物を逃したらしくキョトンとして帰つて来た八五郎を顧みました。

「ヘエ——？ 小僧は手代の吉五郎がどこかへ連れて行きましたよ、親分」

「それでいい。——妹娘を殺して、継母に罪を被^きせようとしたのは、誰だか判るだろう。なア八」

「？」

「曲^{くせもの}者は宵のうちからここに忍んでいたんだ。たぶん納戸に隠れていて、お内儀さんとお雪さんが部屋を換えたのだけは知らなかったんだ。——夜中に這^はい出して来て、お雪さんのつもりでお内儀さんを殺した。雨戸を外から締めて細^{さいく}工をして、——脇差はどうせ川へ投^{ほう}り込んだんだろう」

「……………」

「お内儀さんに継子殺しの疑いを被せるか、雨戸の細工が知れたときは、福松を下手人にする気だったんだ」

「？」

「福松と吉五郎は、昨夜別々の部屋に寝たはずだ。判るか、八」

「判った親分」

ガラツ八の八五郎はいきなり店へ飛んで行くと、神妙な顔をして帳場に控えている吉五郎に組付きしました。

「御用ッ」

「何をッ」

猛然として反抗する吉五郎、この男は身体ができていただけに、八五郎も一応は持て余しましたが、どうやらこうやらねじ伏せて、高手小手に縛り上げます。

「えッ、歩けッ」

鼻面を八丁堀に向けて、いや、八五郎の威勢の良いこと——。

「八、それより常吉を捜せ。——あの小僧の命が危ないッ」

平次の声は家中に響き渡ります。不意に「吉五郎が常吉をどこかへ連れて行つた」という、先刻の八五郎の言葉を思い出したのです。

＊

常吉は井戸の中から半死半生の姿で救出され、吉五郎はお吉お国殺しで処刑になり、事件はそれで落着きました。しばらく経つてガラツ八が絵解きをせがむと、

「今となつては底も蓋ふたもないよ。あのお国という後添いは立派な女さ。自分がさんざん疑われながらも、継子を助けて、越前屋の

ひと粒種を護り通したんだ」

「吉五郎が隠した手紙には何を書いてあったんでしよう。あれはどうとう出ずにしまったようですが」

「多分、お吉殺しは倅せがれの福松ではなくて、吉五郎に相違ないということを書いたんだろう。——あの晩お雪の命が危ないと思って、自分が代ったから、書き置きのもりで書いたのかも知れない。

——お吉殺しは吉五郎の仕業しわざと知っていて、言い立てるほどの証拠がないから、あの晩きつと来ると思った曲者の顔を見定める気だった——だが、曲者の方が役者が一枚上だ。納戸からそつと抜け出して、音も立てずにお国を殺してしまった」

「お吉の死骸の頸くびにお国の腰紐が巻いてあったのは？」

ガラツ八の問いは相当に突つ込みます。

「あれが一番むずかしいところさ。——たぶん下女のお作が見付ける前に、お国は継娘の死骸を見付けたんだろう。その首を絞めたのが、倅福松の前掛けだと判ると、親心の無分別で、あわてて自分の腰紐を解いて倅の前掛けと換え、それを納戸の抽斗ひきだしの奥へ隠し、開いていた雨戸を締めて心張りまでした。——それが済むか済まないうちに、お作が雨戸を開けに来たんだろう」

平次にこう説明されると、もはや疑いも残りません。

「吉五郎はどうしてお吉を殺したんでしょう」

「お吉お雪の姉妹を殺して、その下手人が福松ということになると、越前屋の身しんしょう上は自分へ転げ込んで来ると思ったのさ。そ

れに、吉五郎は長い間お吉に気があったが、肝腎のお吉は近ごろ父親の言うことを聴いて、福松と一緒にいる気になっている。あの晩福松のあとを尾^つけて行つて、福松が歸つた後で、不意に飛びかかつて、用意の前掛けの紐でお吉を殺し、福松が外でブラブラしているうちに、自分の寢床へ歸つて知らん顔をしていたのさ」

「後添いのお国を殺したのは？」

「お雪を殺すつもりだった」

「すると、金釘流の手紙は誰が書いたのでしょうか」

「吉五郎の細工だよ。智恵のある奴は、自分の智恵に負けて、よくあんなつまらないことをするんだ。越前屋に変なことがあると思わせておいて、さいしよは福松を殺す気だったろう」

「へエ——」

「それが途中からお吉が憎くなつて、お吉姉妹を殺して、福松に罪を背負わせることを考えたんだろう。悪い奴だよ」

「なるほどね」

「気の毒なのはお国だ。——でも継娘のお雪を助けて越前屋の血統を護り通したんだから本望だろうよ」

平次はつくづくそう言うのでした。

越前屋の半兵衛とお雪にも、その辺の事情はよくわかりました。お雪に代つて死んだ継母のお国に対する感謝の心持が、やがてお国の連れ子の福松とお雪を結びつけることになるでしょう。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物控（十三）青い帯」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年7月20日第1刷発行

底本の親本：「錢形平次捕物全集第二十五卷 火の呪ひ」同光社

1954（昭和29）年5月10日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1942（昭和17）年1月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2016年9月9日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

お吉お雪

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>